

転職して7年・・・今、福祉の仕事について思うこと

思い返せば、24歳になる年のことだ。自動車整備士の専門学校を卒業した私は自動車関係の会社に勤務していた。仕事は主に、商品の販売促進と車両の整備等をおこなっており、一緒に働く仲間の従業員ともうまくいっていたし、車両の整備も大好きだった。

しかし、一つだけ苦手な事があった。それは、商品の販売ノルマだ。従業員同士が競い合いながら販売し成績を伸ばしていくのだが、競いが熾烈化していくと詐欺まがいな押し売りとなっていくことがあった。私にはそれがどうしても馴染めなかったけれど、正直に言うと、自分も手を染めていて心が痛くて耐えられなかった。ただ、せっかく始めた仕事なのでどんなに嫌でも3年はやると心に決め、3年目の3月後半に会社を退職した。

当時は実家で生活していたが、貯金が全くと言ってよいほどなかったため一刻も早く新たに仕事を探す必要があった。しばらくして、たまたま母が日曜日に入った新聞の折り込みチラシに「昴」という会社の求人が入っていたことを教えてくれた。その会社を少し調べてみると社会福祉法人といい、障害をもった方の暮らしを支える仕事ということと利益を目的とする会社では無いことが分かった。

障害や福祉という言葉に少し興味もあった。理由はたいしたことではないのだが、毎年恒例となっている某TV局の長時間特別番組の1コマに、障害をもった方が何かにかチャレンジしながら必死に生きている様が見られた。私はそれらのシーンを見るたびに涙していた。しかし涙した後にか何かスッキリしない気持ちになる。自分はそれを見て涙しただけで、何一つ自分しようとしていないからだ。だから偽善の涙のように思えて自分自身に腹が立ったのだ。感動するほどのことなら、見ているだけじゃなくてやってみろ。やらなければ分からないと思い、その思いが福祉の仕事に入るきっかけとなっていった。

それから月日が流れ昴へ勤め始めて、かれこれ7年がたとうとしている。

この仕事に就いてまず感じたのは言葉の壁だった。それまでの生活では、当たり前のこととして大半のコミュニケーションを言語に頼っていた私は、明確な言語的発声の無い方たちどう接してよいのか全く解らなかった。

言語がない＝言葉がわからない・だから話しかけても相手は解らないのではないかと勝手に想像していたからである。しかし、短期間ながら、その方たちと接する中で、実は言葉が話せないだけでかけられた言葉は理解されているのではないか？と思うようになってきた。それは目や口元の動き、又は指先の動きなどかすかではあるが、それらが表出されるタイミングに一貫性があり言葉で表現できない気持ちを他の方法で伝えているのではないかと気づいたからである。そのことは、その後、この仕事にのめり込む大きなきっかけになった。

今思うことは、障害をもった方たちを支えていくという役割だけではなく、そこで感じる障害をもった方たちの生きづらさは社会のあり方にもよるということを発信しようと思う。日々、地域で暮らす方たちと接する中で、利用者様のニーズやその方たちを取り巻く地域の課題を一番近い位置で感じている私達が年齢や障害の有無にかかわらず誰もが住みやすい地域社会を創造していくことこそ、福祉の仕事の本質であると感じている。

ファミリーサポートセンター昴 小川純一